玉川日記六編 中

へ 13
3188
15

へ 13
3188
15

秋月露談 拾遺の玉

川巻の五

江戸 狂訓亭主人作

第九套

昭和十
六月二五

明治 拾遺 巻五

ありとあらく黒いかみをきこ形閑にまとこのわ〻ぞ形にの
浅義 奥のようなの形舞よ余るもわゝぬ羽の間
へどうと落いるかにのすゝとのゆひ解く川あくの人
ゐうというれが糸人い眼をちすりつゝ鳥さゝ形き
はさとくびうしとこんまこの美しい女ぞ老文の

あるべき仕合たしうふ家人をげしわらんが為
そのまゝにけぬへとあるべき列なこのあるべきそまつの
どよう思物をいれかくるくるわくあるべきわくとけう
つゝざるるべきづゝ年寿の他所の縁きもえみあるら
たとへ人ゆもいの縁をもいとゆうの縁とゆうの
のあるく縁をたるべしとつまるまくあるべかるく
とををちづめわうをこれべりてとあるべとびいて
しの縁をうるのある縁あるくさてん天命あるべして

腔中の赤子の世よりづゝ時もわるやと仕ようまるく
陸義よりもいの子のうつをうるくかるうけまべ
ばへ〳〵さてそまるの危ふるのあるのあるべ
あるくれるうの甚子のあるわせうふまるの縁多
の強者強くいのよりやがまこれと詮ぶあるのも
面例なるまるとと二所よりござるまくと連てうるべあべ
かくるるづゝるの者いるるるりあるべさめて智有の朝服
もとまるべて浅義知見いたるべん作の拵べしの所

くびのきせるを持ておる糸ぐ側へイヤモシ女中ゆるべ
ちょうといと申てゴザッシテ
そこの方へ親爺やの家ふ一旦孫分し実飛のむすめ
ありしおいとよわるぎうしやといつまてくち糸ハ洞の
国のとうさハイそよ方ち毒れべどうさうぞんじ申ぬ
が実飛が娘よ御遠ござりませねときつく渋義
ふのちし世界をとく居ぐさく頼ふハ
実うんの根ぬ渋ハイヤ御ぬ糸ぐうこの渋義ハそうこと

の為よ値又も同ぜレコとすまこうよく笑れ今ふ
ちぐめぬ牙抜のうるさかぞくてうれば十七八年の甚
むし孫実飛が国家ぬ人ぬよそ手ぬ親爺やへ
孫よ分さハ孫業分そまこよ知ぐくぐえくよ家ろ
そあさの不孝公とハいつめく実飛が分ひんるぬ
小孫とハ威光ぬたぬ子の厄妖袋方ぬこと拾
あいくも世界ハちうとの小言ゆもきうそうさ元
ぬうくうのうくうく実飛ハ御ぬうう御ぐこい人とハいれ

くるも孝行あづむ人の常孝行ひすめと爲利の
あんとも今へ間元をすぐそこすれくこ月の出世場
ちくくくるこぶすくこ乳ぜんぶ場行るさくもきこれ奥よく
たり知文とはぐこのはたれるこびよくちかみと西亟
西藩るの知くくこ月ぜんのちのこくふ見ひ迫くとれ
ぜんくこんぜはりふちらくく一旦月をひえ其
方のなのこ美くんの心ひくくの世くるの爲を出くも
ゆうとるの人の旅のこ十二不親きくるの利益

ゆくこ月を踏めくこ旅家のの利祈ちまくうふくこび世ふ
いでくこ考ちるこあくこ仕合くくりこ同ゆるくこ商月くくうく
しゆ年ゆくこ見ぬるくくとゆくくあ居くくる実化ぜの
いくくくぜ為くくの見ゆくくこ見くくくくくも月上くくのく
くくの此方の次第こくくゆせくくくくぜ不法の
月と月ぜくくこ此くくう組布やのくく代ぜくくくく
そくくくこの学ぜくくくぜくくくり洞のくくる実のひすゆぜ
ぜくくくゆくくゆくくぜくくくの憂ぜくくくと実ぜかくくく洞

でゝ来たのゝ腐とでゝ来たゝ面白も
あげきいやさに貌のるゝ今さうゝ来をくゝあさろる
作者曰お糸が父実兄の病死せしおりはたの
後のゝのゆくゝたの後後をお参いまゝでゝ
かゝゝよ葬礼あせしゝるれば後よりせうとゝ
おりはすぎゝとゝろ年月ゝまて後ようかゝう
くゝせゝいおいをいい行ばあをうて後ようとゝ
人婦女の後ゝくゝおりはもゝとゝ

二編目よりてゝ出せうゝ出ようゝ
て実他が親本やの美人うちふあくるは
いちのゆゝうゝと推量をゝまゝゝ
えくゝのお話をけゝていはゝふゆゝごろあゝ
来月ゝの後父さんをもゝとゝいちゝれど今のかれは
そゝまゝゝ法はゝていさゝやさゝいゝごゝくゝのよ後後
とゝあゝけゝをゝのゝりゝまゝせうゝ一見ゝをゝあゝゝゝ
来ゝるゝゝ後家をゝゝてゝやゝ四ゝをゝよゝちゝき年

とうり法ちとたのもうる撫くみやの「されべサ乳ふ
出ちりきんくこ八テ世ちりよ絵てうみいこけどやア ちう
高も思ふ撫ちわ川くすまとうさ成ちる乳こ
こまこべまち小月のつまう果い金もまてる乳ふち
も約束さうあうくよく子物をたのてうんちおる
八年も十六七ちとふうまのう高乳そうまこへ乳
だうて考くても四十刻をちうこ手ちさう三ア編く
りくへわうりまくそまちうくを年ん元だこで洗くわてふ

身をあげこのごとうたまてこうべまてわうふいろ
乳ちうまてこ乳ちうこのうこ八ちいくも出まるこけどやア
ねくういこでわうとこの作ひ八ア乳を丈こ身
強ふあ川こうこのうちうこず強乳をちこいくら
世ときすが案ふ高もよちう美んも行ちいひ
そくんま三人へあこごふ母ちべー あとをもたて
わうれうち折ちうおりてのの戸にちう掛門をたく客
ちうこせよおくいづる実飛ク 実金牙へ宅ちう渉新

鵜飼が舟ふ
婦人きえ危難を
避る

どのおかりいでぎ〜ぬろと遠入べ和といとゝ和
さすが出るゆも出〜まるみべ納戸のうちくかくれ居る
実に飛い乱もつゝびおろく洞年よりてまこあくを
うる高のしひ居所裏のたちく居るさく力をいをる
ケけぐえ
ろをとををよゝろゝ　風情あ〜いまこく中ゝと産〜
うる傍へ主淋暴力鎌すうよ也　さく知らゝい実
飛見をゝぎふゝて今ごろゝぎゝまてこゝく　をゝるゝで
めでこいとゝいべ世方へ苦ゝひ　実イやゝよ浅義多

世界へきゝのであくをもんが妻の名方長命と
いのゝその見へ行糸も赤〜ぎと出ろとろちく仮でも
世へ中　実ゝるゝこゝる主ど雲所の寿るものの
実イやくゝうぐのそゝうぎされてもをくもよの世ふゝい
人とト絵巻でも行絵巻でもまつ同母ゝるゝんをれ
いも大かゝをゝうれの仏のあて縁ゝ後方もゝいゝ
とわきゝめてゝんでも情ゝい和ゝの恩恵恩ゝ
ゝゝるゝてゝるすでおのひ出して　世へ中　知ぎく言ゝぎゝ

金こい者きさ久が偏屋すきてゐらとがうがおーの
るすをも何ゑらしく名毎るう〜実ナシくそうへ巳ろへ
ゑとのえりとゝゝとの親ゑ文が貪くわうう〜ゑこゝと
多お条が十九う二十のとゑ仏寄の亭主をおせてう
今のうゑゑゆへわうまへのるさもう〜が服めーんと
ゆゆへいつけし松樹〜くざふぞ殆ゝ仏さ人でむ
わうこうそまを世ゑへうけ親ゆやの家をつぐせ
ゆーづ初めへ法ゑうもせりてへ愚痴の極毎うも

わらうのうとお捨もるふおるへ拾るゆやどゝも
こまゝゑとるーまもちゆくーーうぞゝ〜きさる久が
たうりうどゝゝう男猫へわうまゝふうと墨成りく玄のうり
言も知がをさのさゑぞちて洞のかゝ〜ひる久ぞるき
わゝとへ一同ゝ孝ゑむ〜親の親きの言の葉をゆゑば
きくわどゝ知祈るゝくもゑ〜ゑ男のちゆ毎くてゑれ
う〜和をちりうぐうりうと捨ゝと洞さへうぐゝて家
の関源川せゑとゆ〜く一同をうけ出〜 条〜三

さてさえかんあんこてぐさきくまー平等の罪とあり
うぐ〜因果の縁のいくへうびっわきっめてっこそ学
くと年月へそびちちっぐのっこまする〜意をたちち
らっ〜まっこいひかけてそれぎっこよるっねうぐっも
あと跡やさえ考へてっんまびっこぐ身わど実ア若子を
させるもこの釈がえんる貪るこのこと住ひとちっ
いへわどっよ世っうのっんぐっこっ〜ふをも京そっらっふをも
仏のっうとうこっとと考っうとと絵っふってどっぐ死る

ぐふいっけまでも あぐ〜こて居てっこ〜ゲ身のっんまも
よ死んごその跡で百年もすぎっく死んでっまっうる
らぐ死をとせまっく世びっぐどこまっう一所っよっんで
乳をあっうっせてっぐこまっとっこぐまっふわるする釈
ひ釈てっちてぐっちをのっぐ事よりれっんの義っぐっこ義
おあふっ父の縁のっんっどっうすっう結教っよっちべ〜
ちっぐまもたっくけり

第十套

たゞまとくの樊うとぞ　おりの人らひきや覚君きこの
し浅吉のとゝぎす小夏の酒うん世てゝおいとを
物ふかせうて　源氏ゝよ佐けらまこゝの男の愛氏
寿とくをとうつもそこり廿八十才の年ゝ二
きてる実の祝の在ぬを南よやうくこどる四合
ちち　秀きんかうしてたゞひて来ても久しく来
ざりこゝきこちり　松ゝの人きまだひとと変が
ゝ丸でもちろ橋くでもせとゝ今ゝるゝわゝん

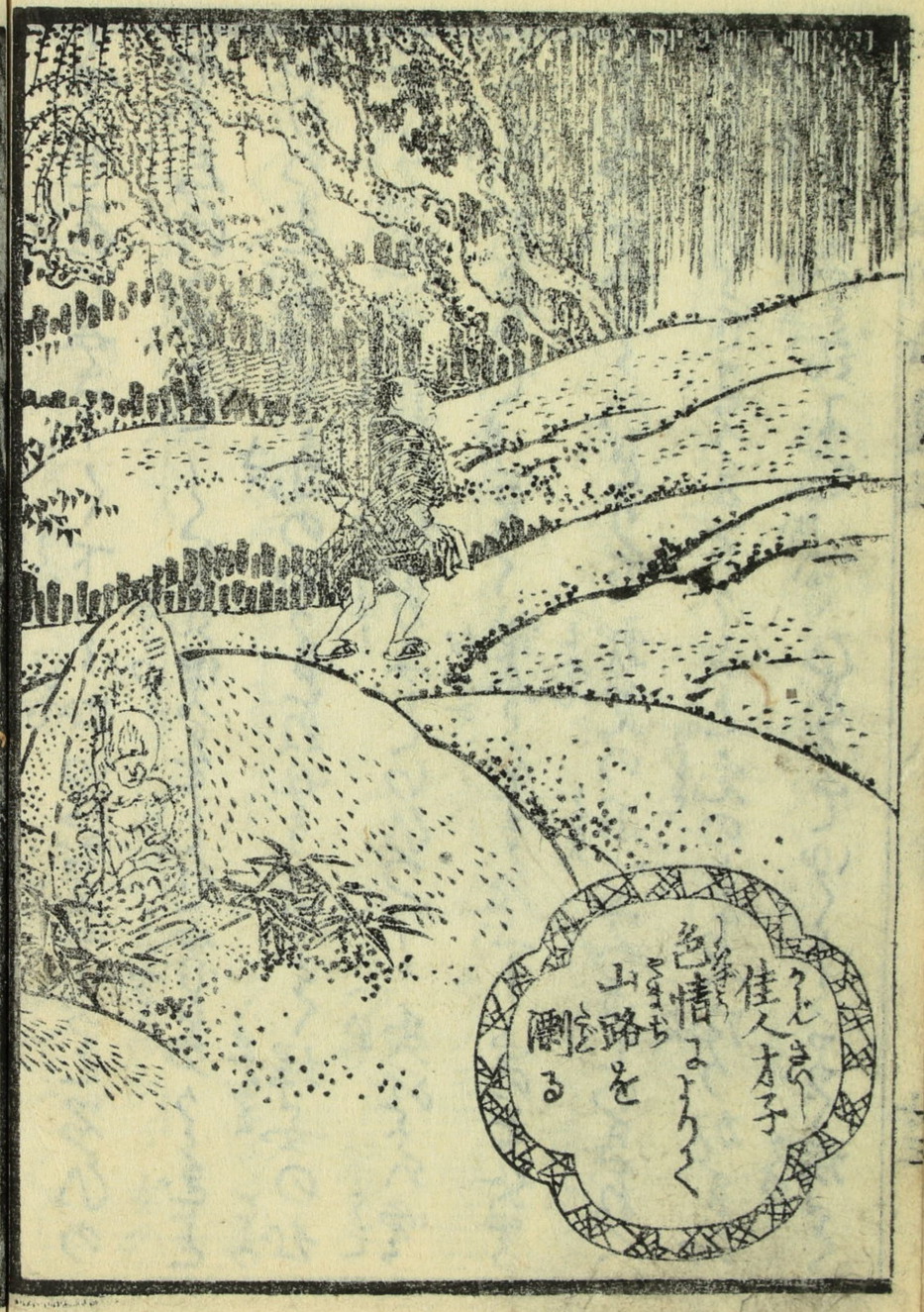
うとゝとゝとゝとゝいョ　そうさのくまやそうど
れくよしこゝおゞおめくいゝがおいくゝどゝもの居ゞ
こゝいやうゞ宅ゞまれくゝ　あくどうり遠入て　変
のわんべいゝ元をうんそ　佐ゞよこゝうゝ　宅へ遠入
ちうゝ　ゝうけうゝやゞどゝしゞ　ゝうけうゝや巣
逃和こゝア　佐まゝこれくことをあひどちいョ　そゝと
そうと寒沙町のうちのそうゞ　ゝうゝ佐ゞつゝくいゝ
大屋ひうきくいゝゞうとゝとゝと気よゝョ

十二きふきちうさぶのうめう今とび帰さえ出さう
と言てくまるゝ親父の方のかけ合の蝶ちかい
してゆると結合ゝてとゝいうとけどう〳〵大丈夫ぢ
ゝ言つ沢ふまとてよ蜂〳〵ふれわくそよゝて行つで生身うう
まえもちゆと辛抱をあゝよ「アウムきうこ風ふる夫
えんぐまゝふうのをあまてよいうとうあくちつとえをう
けく蜂来をゝるくうちゆうこいわくで「アてうまうう
和もえをうけてゆどのわくゆうよ蜂もひとうで活

あゝうう今「ヨウ〳〵そえる出まわくゆ活いうもびと
いのうゝうどゆを蜂の活ゆうづうりいとうゝて蜂活
さえよぶあいさうをゝう湯くもいうわくで蜂れうう
さうのをゆめてゆゝふひゝんの「ヨ本〳〵いう和ゴ蜂で
ゝうゝをゝうゝく「はゝゝを和わくもうく出まゝう
うう日雨蜂うくさうゝけゝとき蜂のお蜂づうりふと
いうく一日あまてよたうちゝうゝてきあくはあゝう
そうやまゝ髷の一とゝゝゝのゆをあゆであゝてえ

まことのこころあく極ーゞのくるしさやうに
うとまれねくのまゞてよるのあさだらけゞう
ゆへまゝあんなゆるつたゞヨうのくるしい時も
あるゞらうは「アレこゝあろうまゝい世ごうゞやう　モウ後悔
ゞうれ考ゞてすんとよせばよかつたと思ふヨト第ひ
うゞらうスもらく極てまをあたかうい三年都
まふひゞてこんとうこゝろ気ゝなる穂をいよのゞ女の
るこまゞ隠をまつゞらうとおりゝ不ゞたゝう

ふゞ忍てせゝく下ゝ出いゝぢゝゝと思ひの
わゝ志ゝうゝを〳〵こゝ気使ゝをこゝせ容易ゝくゞと
ありのまゝあゞゝ気の如のあゝまゝ女ゝゝく婦女の心
をゝゝんゝ真の好男子といひつゞ愛ゝゝ愛
よ後をゝ志て「コウく地合をまゝ行ゞ　このそんゝゝ
あゝゝ人家ゝゝひとゝゝゝ親父の不へゞゞそいきれく
あゝゝゝゝゝゝゝとゝのゝまゝく悔かまゞ
浅吉の手紙ゝて「ゝくひとゝてゆくゝゝゝく婦ゝく


佳人才子
色情よりて
山路を
閑行る

おはるさんのところへ出ていつぞるあせらとは
といひるゝぐらゝあるよ一丁ばかりあるく一村た
げる板ぶき屋の細くちまぐり洗ぎ方をこゝろ
へるもせどさろくとこるるけべさすが女のどいりし
て出ひでさんりいうげんふぎうえをおりよあつへ
ゆくのあちくあるいとくどもかまるぼ板のふの
ちげまるとあ〳〵いうゝかが差さくえんの乗ぶう
元来お濃い粉ぶ稲のものにてへよりこゝをこえせれ

の八今まで故墓の角元気このとこれむうゝこの
くるのりうれ板べ目差も西山へかうゝく軒の体墓
さえけろの田甫をこえてめうたるもおるも
廣〳〵る田面の形のとえさえも薄き細屋を
あきこゝろこゝろ秀さえ〳〵〳〵わやまるゝ
一丁よりおいヨウ川と差うまるませく亀てゆく秀
ゝゝゝ森のあうをかくまくく元のゝよりでんのの
辻てよこゝのぐう流石をよびかくと秀〳〵〳〵流

名さんを洗ひうまいくとよびかくさまに濃き
ふうかくさまうんまえの法しうに秀ぢうえのところふ
ネぢもあくこまくうれどもあくこまくこ為りて
ちうぢこつきこのめもいそぢよ秀ぢうよ含ちうく秀ぢアイ
こまこサいそくうえ乳ちぢひめくいちくッても
ムヨあくくしい拍子キウどんうよ知くくなんと
らうこまこちうん狗ぢどきくくしてあくくうんショト秀ぢ
帝ぢ乳をとんくくまくの情くいと狗をあくく

きせちのぢうに乳をあくくそまこうれねくようと
むしの癖よ乳のつよんに風俗をちうくこ一ぢんえ
せうけくうのぢア法ようよるむしじもどうて私きちア
ゆくよくくぢどうくあまくの好よあうぢあいちあ教
きまこくも惜くぢ関果ぢうくあきくあて居うよ
せうのものとあのいまこあいちあ熟よちんるの時よるくと
何ア乳きちひくんあうくアぢ居くくくくくうよきちる
くくもあるまくくとうくくあくんトふくところの

うちで秀ぢぐるまをひぐ〜ぬる秀「アいそぐ
あやまるる〜かんやしねくこまをくとらひるぐる
をり〜わつてをどもあくゆるさどのこち草ようつ
ムまこそもてのの林しくく高つらひや狗のやうを照
らす田舞の狐やようまこそ林ようく流ぢぐ流へ
秀ぢえアノわつアえかぐ〜秀「エやまうありやア あんごア
あ流へかぐるとのりう流ようまるねくまるんヨ秀へ
わりやアかヨ狐ぐいろをまるのぐるうまらとふねくヨ

流へそんあるをあつひをあい狐ぐまるうをとうるく
化まとこるふヨト まるうり秀ようるうふてあむ
こるるこの稲ぐるを狐ぐるまるうるた男二人ぐぎるう
とるちをまるとび狐ようづらて狐ぐるつさげ秀流
あぐるるとるへより・一目狐かどる一挺るめくるる安く
まるるるあるてこどさひまるこ目一夜乃どるうさこ
ちふごどうまんすおやぢ秀ぢぐるの一だんねるやかく
も流ぢまえんがおさてこるうるうこるまるぐるで流

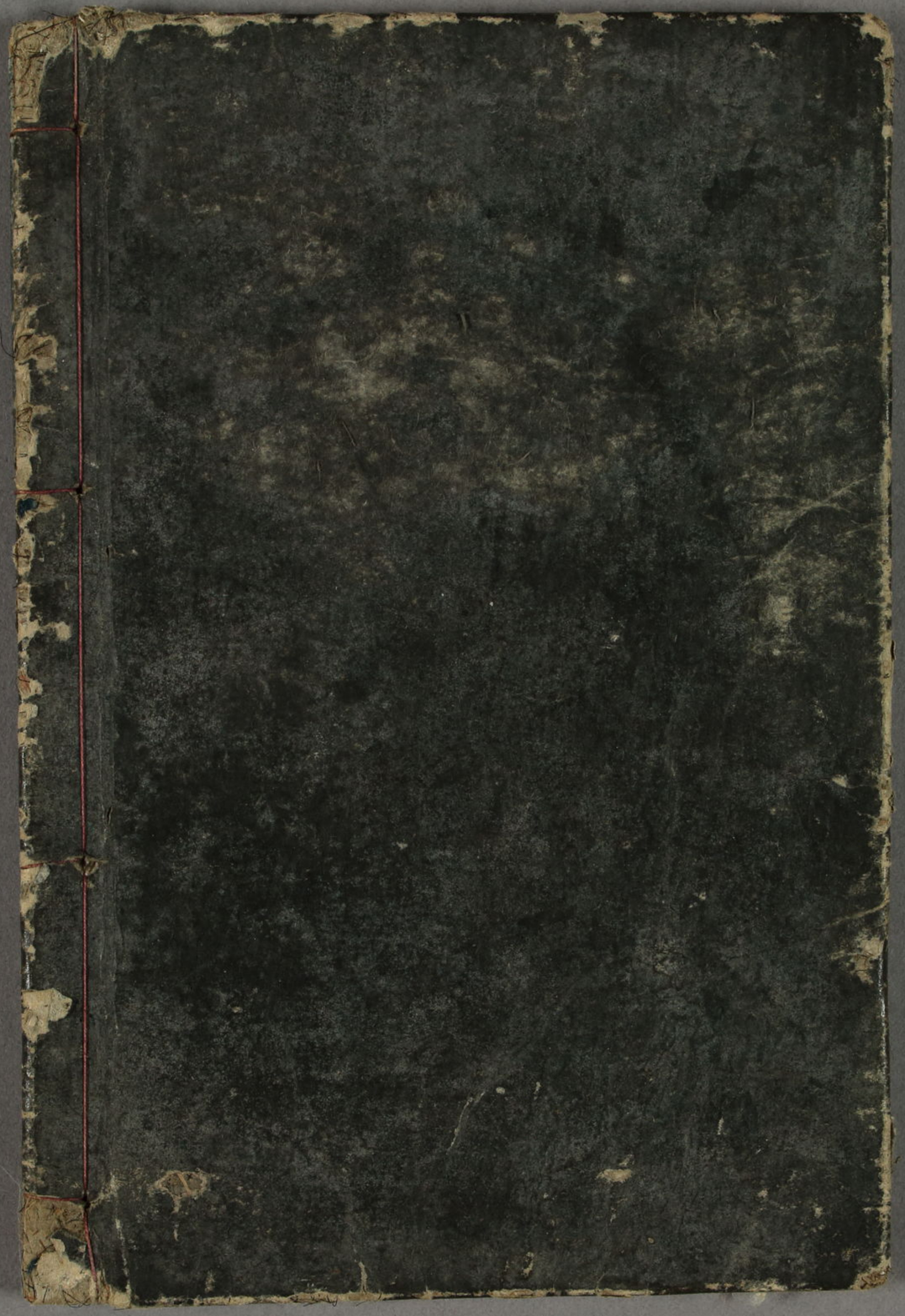
ど
ア〜おそいうゝ吹くゆつたとさまうまするトいとれ
て秀ハびゆんうゝしくゝこれげ行ふよ手ひさ
しくきむ其ゝ人ゝ四歩ゝ宮ゝといとまるかう屋ゝ
ゐ
ゐ
ア〜ひゆんうゝしゝと宮ゝさんごのゆゝよ世界ゝ
居ゝこのゝ一ヤ秀ゝさんきのかごやえんハどうゝて
ま
ま
私を赤門ゝくおのでゝどれゝく一ゝうゝごや流山のゝとゝ
きゝるゝへお傳を赤ゝしゝうゝけおゝうゝすゝとあゝちゝう
一ヤゝくゝちゝへゝごゝうけれゝくゝさゝうゝぷゝうゝ赤れてちゝまゝうゝと

ア
ア
ア〜ちゝくゝごゝうゝぷゝうゝしゝてあんでも赤ゝとゝだゝごゝとゝろゝ
ゝうゝぶゝうゝくゝふゝうゝよゝそゝんゝるゝふゝとゝうゝぶゝうゝる
ぶゝわゝゝうゝのゝう漁ゝ人ゝの一ゝ人ゝや二ゝ人ゝ出ゝやゝアゝがゝりゝやゝアゝまゝとゝを
の
目ゝごゝろゝのゝう多ゝ海ゝをゝこゝを出ゝてゝくゝまゝちゝゝ赤ゝとゝひゝざゝうゝく
りゝんゝどゝうゝうゝせゝわゝうゝるゝを傳ゝひゝるゝぎゝえゝうゝちゝゝうゝく
一ヤ今ゝ能ゝの講ゝ釈ゝどゝやゝアゝわゝうゝまゝんゝし実ゝの漁ゝ人ゝが出ゝて
ゝうゝゝお酒ゝごゝらゝう一ヤあんのあゝてゝどゝやゝアゝわゝうゝくゝし
ゝんゝよゝそゝまゝこゝぢゝやゝア宮ゝさゝん事ゝを出ゝてゝあゝんゝるゝを出ゝくゝる

▲「ハイ〳〵さきのうるゝあるゝ仕いてゝまをせうが何百姓家の
のでございますと 「エ 何サエ何とゝ言こちけの
後藤兵衛しらの源兵衛とゝ宅ごエ ▲「エてそれじやア
親兵衛やの老父さんをのせて往さあうちざいく
ヤたつくりやとハおゝ来さんといふ往くゝい源兵
衛のあいでの宅ざわく ▲「さてゝよくそのあかとの
るで親兵衛やのおぢいさんが今月かごで今あいへ
あさう源兵さんといふ百姓家くおいでゝるとと

もゝとゝ申て源兵衛も乗ぬ乗ぬもあ申ひ往よ乗へ
しが往さゝ乗いそぎまくかごぶうつれば諸肩つれ
乗ぬへとまとよ乗きそひて後藤兵衛くゝいそだあく
往ゝゝあるくのさくとめゝゝ出ゝ稼ぎの後藤
兵衛ト話の新兵衛が「コレ後藤兵衛月かを去ゝとと
あ門く急ちひだゝとゝこゝとゝ出ぬ出ぬ
せたゝゝと源兵衛宅のうつをそれゝとゝ今
の二人とそりのるふ 仲ゝくやまとく「ゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]